

の地。平野部とはまったく価値観の異なる人々の住まう土地となる。

昨晚、シエルツはエレにたずねた。

やはり行きたくない、と言ったところで、罪にはならないし、責めもしない。本当に行くのか、と。

「わたし、わかつたんです。わたしがうまれてきた、いみが、びょうきの村は、わたしじゃなくても、やくにたてます。でも、あの人たちの村で、いま、やくにたてるのは、わたしだけです。うまれたときから、あざのある、わたしだけ。かみさまがえらんだ、しるしです」

エレは、「神が選んだ者の身体には、印が現れる」という部分にこだわっているようだった。

歴史をたどれば、遙か昔に山岳民が神に捧げていたのは、壮年の男だった。それが、宣教師がもたらした教会の教えと結びつき、混ざり合っているいまの形となった。つまり、神の意思とは、その時々の時勢や為政者によってつくられていくものなのだ。

それをエレに告げるのが、はたして正しいことなのかどうか、シエルツにはわからなかった。エレはいま、生まれてはじめて、世界から必要とされた喜びを得ているのだから。

人の気分を害することを極度に恐れ、常におどおどしていたエレが、巫子になると決めた瞬間から変わった。

自信なさげに言いよどみ、不安で瞳が揺れていた少女から、怯えが消えたのだ。急におとなびて、終始落ち着いている。

今朝、エレはラバのことをたずねてきた。三日分の飼料を置いて宿に預けてきたと言うと、少し寂しそうな顔をした。

「ずっとわたしをのせてくれました。わたしのかわりに、ありがとう、っていつて、なでてくれませんか。あの子は、耳のうしろを、なでてもらうのが、すきなんです」

シエルツがうなずくと、エレは穏やかに微笑んだのだった。

馬に揺られるエレの顔には、清々しさすらあった。

空を貫くようにそびえる岩壁、複雑な山風を巧みに掴み舞う驚のシルエット、岩の割れ目に宿る可憐な花。

それらの全てが、静かな感動となってエレの心に沁みわたっていた。

それは、深い喜びに似た幸福だった。

馬車に乗る夫婦はしきりに後ろを気にしていたが、太陽が頂点をわずかばかり回ったところ、一行は集落への分岐点へたどりついた。細い道を前に、シエルツは「ほんとうに行くのか」と再び問うた。だがエレは、強がるわけでもなく、自然にうなずいたのだった。